

# 2024 年度事業報告

(自 2024 年 2 月 1 日～至 2025 年 1 月 31 日)

公益社団法人 日本薬学会

## I はじめに

日本薬学会は薬学における中核的学術団体として、医薬品の創製、製造、有効性と安全性、供給、適正使用、生体での作用機序に関する情報発信・交換・支援をはじめ、広く医療機器、再生医療、予防医学や生命科学に関する学術や産業の発展に貢献してきました。また薬剤師教育・薬学に関わる人材育成に関して文部科学省、厚生労働省、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会、医薬品関連産業界や健康・医療関連産業界等との連携を基に、責務を果たしてきたと考えています。2024 年度に取り組んだ主な事項について以下に示します。

- ① 日本薬学会の最大の学術活動となる第 144 年会（横浜）が、2024 年 3 月 28 日～31 日に『「遺伝子」や「環境」と共栄する薬文化の創生』をテーマとして、星薬科大学の米持悦生組織委員長の下で、5 年ぶりに完全現地開催されました。
- ② 我が国で初めて「薬」をキーワードにした学術団体を束ねる日本薬系学会連合の設立に貢献しました。2024 年 2 月 2 日に一般社団法人となり、会員学会は 31 学協会となっています。2024 年 5 月に長井記念ホールにて開催された設立記念フォーラムにシンポジストを派遣して薬系研究の展望について討論を行い、その成果を発信しました。
- ③ 学会の支部・部会は、支部長会議と部会長会議の交流を通じて互いの位置づけを共有した上で、個々の計画に基づき活発な学術活動を展開しました。
- ④ 学術の更なる充実発展を目指し、Chemical and Pharmaceutical Bulletin、Biological and Pharmaceutical Bulletin について、オープンアクセス誌へと移行しました。また、公開は Article-Based Publishing（順次公開）としました。YAKUGAKU ZASSHI では臨床薬学領域研究の多様化に対応するため、臨床薬学領域の英文投稿およびケースレポートを受け付けました。学会誌ファルマシアは本学会会員を含め、多くの薬学関係者への有効な情報提供を継続しています。ペーパーレス化推進のため、電子本の機能充実を図っております。
- ⑤ 学会主催の創薬セミナーは、伝統を踏まえたプログラムに加えて、ベンチャー企業家、PMDA 関係者からアカデミア研究者の情報交換と相互交流を促すことを目的として、創薬相談会を開催し、若手を中心とする創薬研究者がグローバルな視野で最先端創薬を考える場を提供しました。
- ⑥ 今年度も長井記念薬学研究奨励支援事業により博士課程大学院学生の勉学支援が行われました。また、博士学位取得後、研究者として活躍されている本支援の受給者を表彰するために 2021 年度に新設した「長井記念若手薬学研究者賞」を今年度も受賞者を選考しました。
- ⑦ 本学会の「男女共同参画社会づくり宣言」女性研究者のキャリアアップ並びに研究活動の支援を進めるために 2021 年度に新設した「女性薬学研究者奨励賞」について今年度も受賞者を選考しました。
- ⑧ 将来の薬学の進歩を担う若手人材の育成に貢献するべく活動しました。薬学教育委員会では、研究や教育に関する意見収集や情報提供の一環として、全国の薬系大学から

参加者を募りワークショップ(WS)を実施しました。8月には学部生を対象としたWSを5年ぶりに合宿形式で開催して「研究マインドを持つ医療人材の育成」について議論しました。また、1月には博士課程の大学院生向けにオンライン開催し、薬学研究的魅力やキャリアデザインについて意見交換を行いました。これらWSのプロダクトは、薬学教育委員会が取りまとめて本会ホームページで公開されています。

- ⑨ 国際交流活動を活発に展開し、第144年会においてドイツ薬学会(DPhG)、台湾薬学会(PST)、カナダ薬学会(CSPS)より講演者の招聘を行い、国際交流シンポジウム「次世代薬学アジアシンポジウム」を開催しました。また、これまでの協議に基づいて、2024年6月に会頭がカナダを訪問して、カナダ薬学会(CSPS)とMOUを締結しました。2024年11月には、タイ薬学教育協会(PECT)の新代表者が来日される機会を捉え、国際交流委員が対面する機会を設け、タイ薬学教育協会(PECT)とMOUを調印しました。このほか、2024年10月に開催された韓国薬学会秋季年会へ本学会より会頭、講師2名の派遣を行い、交流を深めました。
- ⑩ 日本薬学会は会員数の増加と活動の更なる活性化を目指し、若年層からシニアまでを対象とした新たな資格を導入し2024年度より運用を開始しました。この取り組みにより、中高生のジュニア会員から、定年退職後も引き続き貢献できる終身会員やシニア会員として、薬学会の一員として積極的に学会活動に参加することで、薬学の発展に貢献いただくことを期待しています。

## II 事業実施状況

### 1 代議員総会の開催

日 時：2024年3月28日(木)

場 所：パシフィコ横浜 501シアター

### 2 学術研究・教育活動の推進

#### 1) 学術誌の発行・表彰

##### (1) 学術誌の発行

学術誌の特性を最大限に活かした原著論文・総説の掲載により、薬学ならびに関連分野における科学の発展に寄与してまいりました。

本学会の学術誌への投稿意欲を高めるために、査読期間の短縮、出版までにおける作業の効率化を継続的に推進してまいりました。

YAKUGAKU ZASSHIでは臨床薬学領域研究の多様化に対応するため、臨床薬学領域の英文投稿およびケースレポートを受け付けました。

英文誌ではテーマを絞った、興味深い内容のカレントトピックスを掲載しました。

英文誌はオープンアクセス誌への移行を進めてまいりました。また、公開はArticle-Based Publishing(順次公開)といたしました。

2024年度の学術誌の刊行は、以下のとおりです。

##### ① YAKUGAKU ZASSHI 第144巻

掲載論文数：135編/昨年比編2減

(早期公開3編/昨年比4編減、英文投稿14編/昨年比増減なし、臨床薬学領域29編/昨年比1編増(誌上シンポジウム除く)、ケースレポート3編/昨年比1編減)

発行部数：550部(月刊)

- ② Chemical and Pharmaceutical Bulletin(CPB) 第72巻  
掲載論文数：155編／昨年比29編増
- ③ Biological and Pharmaceutical Bulletin(BPB) 第47巻  
掲載論文数：274編／昨年比31編増

## (2) 授賞

学術誌発行において審査に貢献した査読者、被引用数の多い論文、掲載数の多い著者（連絡著者に限る）を選考し、賞を授与いたしました。

- ① Top Reviewer Award  
YAKUGAKU ZASSHI、CPB、BPB（各1件）
- ② Highly Cited Review Award、Highly Cited Article Award  
CPB、BPB（各1件）
- ③ The Most Published Author Award  
CPB、BPB（各1件）

## 2) オンラインジャーナルの発行

生物系オープンアクセスジャーナルのBPB Reportsでは、投稿者の幅広いニーズにこたえるため、学術誌3誌にはないReportという論文カテゴリーを設け、掲載を行ってまいりました。

2024年度の発行は、以下のとおりです。

BPB Reports 第7巻

掲載論文数：36編（昨年比5編減）

## 3) J-STAGE との連携

### (1) 学術誌のオンライン公開

高度情報化社会の趨勢と、本学会の公益性を視野に、YAKUGAKU ZASSHIを年12回の発行日と同日にJ-STAGEにて全文公開をいたしました。また、CPB・BPB・BPB ReportsはホームページならびにJ-STAGEにて全文公開をいたしました。

### (2) 会誌のJ-STAGE公開

ファルマシアは、最新号の本文を年12回の発行日と同日にJ-STAGEにて公開いたしました。執筆者のご希望により、本誌でモノクロ掲載としている図をJ-STAGEでは電子付録にてカラー公開いたしました。なお1年未満の記事公開は会員限定としております。

### (3) 部会誌のJ-STAGE公開

MEDCHEM NEWSは年4回（2月・5月・8月・11月）の発行日と同日にJ-STAGEにて全文公開をいたしました。なお1年未満の記事公開は医薬化学部会員限定としております。

## 4) 学術研究集会の開催および部会・支部活動の支援

### (1) 年会の開催

年会は、領域の異なる研究者が一堂に会して、薬学の進歩を横断的に知ること

のできる全国規模の大会です。特にシンポジウムの企画・募集にあたっては、多様な領域を包含できるものとなるよう留意しています。第 144 年会および第 145 年会について、組織委員会を中心に次のとおり企画しました。第 144 年会は完全現地開催で、8,344 名が参加して行われました。

① 第 144 年会（横浜）

日 時： 2024 年 3 月 28 日（木）～31 日（日）

場 所： パシフィコ横浜

テーマ： 「遺伝子」や「環境」と共栄する薬文化の創生  
～持続可能な“デジタル治療”の融合を目指して～

組織委員長： 米持悦生（星薬科大学）

② 第 145 年会（福岡）

日 時： 2025 年 3 月 26 日（水）～29 日（土）

場 所： 福岡国際会議場、マリンメッセ福岡 B 館、  
福岡サンパレス

テーマ： 薬学エコシステムの推進：  
異分野連携で拓く未来のイノベーション

組織委員長： 大嶋孝志（九州大学大学院薬学研究院）

## （2）部会の活動

部会は、薬学研究の高度化と若手研究者や薬学生の育成を共通の主要課題とし、シンポジウム、フォーラム、研究会等を開催するとともに、創薬研究者の育成等、各部会の環境、状況にあわせて特色ある活動を進めてまいりました。また、部会間で協力し、他機関との連携を図りました。

## （3）支部の活動

支部は、地域ごとに会員が日本薬学会を身近な存在として活用できる場です。学生会員の積極的な参加を促す学術集会、地域薬剤師会との交流、薬学講習会での最新情報の入手、支部表彰事業ならびに高校生への薬学ガイダンス等地域の特性を生かした事業展開を行うよう努力してまいりました。一般社会へ薬学の正しい理解を広げるとともに、若い世代へ積極的に働きかけを行い、会員増強運動を進めました。

## （4）創薬セミナーの開催

本セミナーは、創薬に係わる最先端の話題と情報を提供し、今後の創薬に関して有益な議論をする場として、毎年開催しております。第 39 回セミナーでは、従来からの現地開催と同様に、社長講演、招待講演、自由討論会、産学連携を志向したポスターセッションを実施して、若手を中心とする創薬研究者がグローバルな視野で最先端創薬を考える場を提供しました。

また新企画として、創薬セミナーに参加するベンチャー企業家、PMDA 関係者からアカデミア研究者への創薬戦略指導を行なってもらうと同時に両者の相互交流を促す目的として、創薬相談会を開催しました。

・第 39 回創薬セミナー

日 時： 2024 年 7 月 10 日（水）～ 12 日（金）

場 所： メルキュール長野松代リゾート&スパ

参加者： 計 170 名（有料参加者 139 名：会員 45 名・  
非会員 88 名・学生会員 6 名、関係者 31 名）

## 5) 学術研究・教育活動の奨励・表彰

### (1) 研究奨励

日本薬学会では、博士の学位を有する多様な薬剤師あるいは薬学研究者の輩出により、薬学のさらなる発展に資することを目的として、日本薬学会学生会員が学位取得を目指して研究に専念するための奨励支援を行うべく、2015年度より採用者へ奨励金貸与を開始しました。2016年度より設置した長井記念薬学研究奨励特別委員会では、運用手続きの整備を行いました。当年度採用者を加え、貸与を継続し、また、選考委員会による選考結果を受け、2024年度採用内定者を決定しました。2022年度から顕彰事業として「長井記念若手薬学研究者賞」の授与を開始し、奨励金が如何に役に立ち、研究に向き合うことができたか、現在の研究状況、将来の抱負等の採用者からのメッセージを、ファルマシアおよび年会シンポジウムにて公表しました。

### (2) 授賞

薬学研究の奨励・表彰は、日本薬学会の目的である薬学の進歩・普及にとって重要な事業です。2022年度より女性薬学研究者奨励賞を新設するとともに、佐藤記念国内賞の受賞対象をより明確にするためその名称を佐藤記念 医療貢献薬剤師賞に変更しました。それぞれの授賞規定に基づき各選考を実施し、その公正な選考結果を受け、2025年度学会賞受賞者を決定しました。奨励金の受領を終了し博士の学位論文提出から5年後の活動調査で、薬学の発展に寄与する強い意志を持って活動している研究者を表彰し、「長井記念若手薬学研究者賞」を授与しました。

① 薬学会賞	4件
② 学術貢献賞	1件
③ 学術振興賞	4件
④ 奨励賞	8件
⑤ 女性薬学研究者奨励賞	2件
⑥ 創薬科学賞	2件
⑦ 教育賞	2件
⑧ 功労賞	0件
⑨ 佐藤記念 医療貢献薬剤師賞	1件
⑩ 長井記念若手薬学研究者賞	4件

### (3) 他機関関係賞等への推薦

各財団・機関から本学会への関係賞等の推薦依頼に対し、会員から候補者を選考し、推薦しました。さらに、国（省庁）による表彰について会員から候補者を推薦しました。

## 6) 薬学教育基盤の整備

薬学に関する学術の進歩を持続するためには学術活動に従事する人材育成が欠かせません。しかし、現在は大学院博士課程への進学者が激減しており、今後、研究能力を身につけ博士として学術を推進する人材（学会員）が不足する懸念が生じています。そこで薬学教育委員会は、本学会の目的である「薬学に関する学術の進歩および普及をはかる」に沿って、今後の学術進歩を担う若手人材の育成に貢献する

活動を2022年度より開始し、本年度は以下の事業を行いました。各事業で開催したワークショップ（以下、WS）のプロダクトは報告書としてまとめ、日本薬学会の「薬学教育」のホームページで公開しています。

### （1）大学院進学促進事業

薬学部学生の研究や教育に関する意見収集や情報提供の一環として、全国の薬系大学から参加者を募り、WSを実施してきました。昨年度は、薬学生と博士を取得した先輩との交流をテーマにWSを開催いたしました。今年度は、感染症の状況が落ち着いてきたことを受け、2024年8月24日（土）・25日（日）の2日間、昭和大学の富士吉田キャンパスにて1泊2日で開催しました。実際に集合してのWSは実に5年ぶりで、5年および6年の薬学生57名、大学教員15名が6、7名ずつの9グループに分かれディスカッションを行い、集合・対面形式で学生と薬学部教員が一堂に会するWSを開催しました。

テーマは「研究マインド・能力を持った医療人材を育成する6年制薬学教育を考える」とし、4年生以上の学生で卒業研究を積極的に行っている学生・大学院を目指す学生を集め、薬学部教育の重要な課題である「研究マインド・能力」についてのディスカッションを進めました。

本WSの第1日目は、自分達の研究環境の情報共有から卒業した先輩からのメッセージも参考に研究マインド・能力を育成する理想的な大学カリキュラムを考え、第2日目は消費者庁の紀平氏から、今、そしてこれからの薬剤師にいかにか研究能力が重要かを講義いただき、これから自分達がどのように研究能力を磨き社会に貢献すべきかを話し合いました。宿舎でも、夜遅くまで学生達の話し合いは続きました。薬学教育委員会では本WSのプロダクトとアンケート結果に基づいて、2025年度も同様の集合・対面でのWSを継続して開催する予定です。

### （2）薬学若手研究者および大学院生のキャリアサポート事業(オンラインWS)

昨年度、今後の学術研究の進歩を担う若手人材の育成に資する活動として「大学院生および博士取得者のためのキャリアデザインに関するワークショップ」を開催しました。このWSの継続活動として、今年度は「2024年度 大学院生のためのキャリアデザインに関するワークショップ」を2025年1月24日（金）にオンライン（zoom）開催しました。本WSには、全国の薬系大学博士課程在籍する大学院生54名が参加しました。テーマは「これからの「薬学研究」を支える大学院生集まれ！薬学研究の魅力を語り、薬学研究の輪を広げよう！>」とし、参加者は学問領域や大学・職場の枠組みを越えて、学術研究やキャリアデザインについて意見交換を行いました。研究者の先達としてシンシナティ大学の水野氏、徳島大学の大高氏に今後の臨床・基礎の垣根を越えた薬学研究についてまずはお話いただき、どのようにしたら薬学研究の輪が広がり、評価されるのかを話し合いました。大学院生から薬学部教育への進言でも有益な意見をたくさん聞くことができました。

### （3）第三者確認作業

社会に資する生涯研鑽支援活動の一環として、健康サポート薬局に係る研修

プログラムを確認するための第三者機関として、2016年に厚生労働省から本学会が指名を受け、2020年度からは、特別委員会として設立されております。活動につきましては、前年度までに適合とした7機関からの更新、変更申請を受けて確認作業を行い、適合通知を発出いたしました。

### 3 学会情報の配信

日本薬学会の大きな役割に、信頼できる科学情報を社会に発信していくことが挙げられます。薬学関連の学術教育研究、医療における薬学の貢献、さらには薬学分野の行政・産業等に関する最新の動向を、会員間のみならず広く社会と共有し、医療健康福祉社会の発展に寄与するために、適切な手段や機会、あるいは媒体を準備・提供し、会員相互および会員と非会員あるいは社会一般との間で接点を拡大し、情報交流を促進しました。

#### (1) 社会への発信

2024年3月12日に記者会見を行い、本学会活動、年会について情報発信を行いました。内容はYouTubeでの公開も行っています。

年会組織委員会と広報委員会の共同発行による「年会ハイライト集」にて、本学会会員の学術活動の紹介を行いました。

#### (2) 会誌の発行

会誌「ファルマシア」は、会員の広報誌として内外の情報を分かり易く提供し、また会員相互のコミュニケーションの円滑化をはかることを基本として編纂しております。学会広報および情報誌として一層の充実をはかるべく、特集号(6回)とミニ特集号(3回)の企画を含め、年間12号の発行を実施しました。J-STAGE登載の周知や最新情報の発信に向け、HPの迅速な更新に努めました。

第60巻 発行部数 約11,500部(月刊)

#### (3) ホームページの更新

対外的にも興味を持っていただける情報発信を強く意識しつつ、一方で薬学に関係する若い世代へエールを送り、薬そのものや学会活動に関心を高めていただけるよう、学会の最新情報の掲載ならびに会員へ向けての情報公開に努めました。

2024年度には、様々な企業・大学・団体が本学会活動を支援していることを示すべく、トップページと賛助会員一覧へ賛助会員各機関のバナーを掲載しました。また、英語での発信にむけた対応を進めています。

これに加え、学会沿革紹介の更新により本学会の紹介をより詳細に行うとともに、薬学に興味を持つ若い世代の増加に向け、各企業のウェブサイトや、大学が利用する進路情報サービスで公開されている、中高生向けコンテンツを「薬学」という観点でまとめた情報発信の準備を進めています。

#### (4) メールマガジンの配信

メールマガジン「ファームナビ」にて、配信を希望する会員登録者に日本薬学会の動向やメッセージを配信することにより、学会情報の共有化をはかるととも

に、会員への一斉連絡用のツールとしても活用しています。

配信 10 回 配信数 14,570 名（平均）

学術誌編集委員会の英文ニュースレターを通じて、年会、その他シンポジウム等の広報活動を行いました。

「ファルマシア」デジタルブックの認知度向上と閲覧・利用促進をはかり、当月号の簡単な紹介と、リンクを付けたメールニュースの配信を 2024 年 10 月より開始しました。

## （5）出版物

2024 年 11 月にポスター資料「医療・薬学で日本、そして世界へ貢献 ～ 薬学を学び、『くすり』を通じて社会に貢献しませんか！～」を作成しました。本資料は主に高校生を対象とし、「くすりについて学ぶ」ということに興味をもってもらうこと、将来（大学）の進路選択肢の一つとしての「薬学部」の存在を知ってもらうこと、卒業後の就職先にさまざまな職業選択肢があることを思い描いてもらうことを目的としたもので、今後全国高等学校への発送の他、支部・部会での活動等で活用されるよう周知を進めます。

薬学紹介小冊子、「高校生のための薬学への招待」と「これから薬学をはじめのあなたに」は 2021 年 2 月の全面改定以来、累計 32,000 部が利用されました。高校生の進路指導資料として、あるいは薬系大学・薬学部 1 年生のガイダンス資料として活用されることで、薬学ならびに薬学部への正しい理解と知識を深めることに寄与しています。

これに加え、入学生や研究室配属が決まったばかりの学年を対象とし、学会へいざなうためのパンフレットの作成を現在進めています。

## （6）会員向けお知らせページの活用

2022 年 6 月に稼働開始した新会員システムの機能です。主に会員向けの事務連絡を中心に、常置委員会・特別委員会からの連絡や、メールマガジンで対応できない期限の短い通知などにも活用しています。

## 4 他機関との交流協力とグローバル化の推進

### 1) 他機関との交流協力

他機関との交流と協力をはかり、広く社会に貢献するよう努めました。

#### ① 日本学術会議との連携

薬学の存在感を高めながら、我が国の科学技術の推進に寄与するため、科学者コミュニティを代表する機関である日本学術会議薬学委員会との連携・協力を保ち、共同主催にて開催していますが、2024 年度の開催申請はありませんでした。

本学会と密接な関連をもつ団体の講演会、学術集会等の開催を共催、協賛あるいは後援し（国内 155 件、国際 13 件）、積極的に支援しました。

#### ② 日本薬系学会連合（一般社団法人）への参画

本団体は我が国で初めて「薬」をキーワードとした学術団体を束ねる連合です。2024 年 5 月 11 日には、長井記念ホールにて開催された設立記念フォーラムにシンポジストを派遣して薬系研究の展望について討論を行い、その成果を発信

しました。2025年3月20日に開催される、第2回設立記念フォーラム「ともに語ろう 薬学の未来」にシンポジストを派遣して、薬学研究者養成の課題と展望について討論を行う予定です。

### ③ 日本化学連合（一般社団法人）への参画

本団体は我が国の化学および化学技術関連学術団体の連合体（13学協会が正会員）として、化学と化学技術の振興を通して社会に貢献することを目的として活動している。日本化学連合シンポジウムの開催（本学会と共催）、化学コミュニケーション賞の表彰などを実施している。

## 2) グローバル化の推進

諸外国の薬学関係団体や薬学関係者との交流を行い、本学会の国際的地位向上および薬学の国際的振興に寄与しました。

### ① 交流協定に基づく交流

#### ・ドイツ薬学会（DPhG）

2024年11月20日から22日に開催された医薬化学部会主催の第41回メディシナルケミストリーシンポジウムへ代表者1名を招待し、ご講演いただきました。

#### ・韓国薬学会（PSK）

2024年10月21日から10月23日に開催された韓国薬学会秋季年会へ本学会より会頭、講師2名の派遣を行い、交流を深めました。

#### ・カナダ薬学会（CSPS）

2024年6月10日から14日のカナダ薬学会年会に講師派遣の依頼があり、会頭を含む代表者5名を派遣し、2024年6月12日にMOUを締結しました。

#### ・タイ薬学教育協会（PECT）

2024年11月12日にタイ薬学教育協会の新代表者が来日されるとの連絡があり、国際交流委員が対面する機会を設け、会頭の署名が入ったMOUにて調印の対応を行いました。MOU締結前から準備を行ったため、MOUでの取り決めとはイレギュラーとなりますが、第145年会（福岡）に、国際交流事業としてシンポジスト1名を招聘予定です。

### ② その他

2024年3月31日に開催された「第144年会（横浜）」へドイツ薬学会、台湾薬学会（PST）、カナダ薬学会より講演者の招聘を行い、国際交流シンポジウム「次世代薬学アジアシンポジウム」を企画し、ご講演いただきました。

## 5 学会基盤の整備・確立

### 1) 会員関連

#### (1) 会員増強への取り組み

次世代へ向けて、より一層の発展を目指すためにも、会員は学会の基盤であり、かけがえのない財産です。多岐に亘る薬学の学術の魅力の向上を図り、会員増強へ繋げてまいりました。

会員数増加に向けてのワーキンググループを立ち上げ、会員を増強するための方策と日本薬学会としての活動の活性化に繋げるための検討をしてまいりまし

た。

若年層にも学会活動に親んでもらいたいという期待を込め、学生ジュニア会員、中高生会員、の2資格を新設し、2024年度より運用を開始しました。今後、常置委員会、支部・部会とも連携して当該会員へ向けた企画をより充実させていきたいと考えています。

また、これまで定年退職等が退会の理由になっている例が多く見受けられたことから、永年会員に加え、終身会員、シニア会員の2資格を新設し、こちらも運用を開始しました。積み重ねてきた知見は何物にも代えがたいものです。会員継続により薬学の発展に引き続きご活躍いただきたいと考えております。

## (2) 会員登録状況

会員数 (2024年1月31日現在) 15,085名

正会員 14,659名

(一般会員 10,663名)

(シニア会員 495名)

(終身会員 284名)

(学生会員 3,184名)

(学生ジュニア会員 33名)

海外会員 115名

中高生会員 7名

永年会員 228名

名誉会員 43名

有功会員 (第二項) 33名

賛助会員 208機関

2024年度末 (2025年1月31日) 現在、正会員のうち1,002名が2024年度会費未納者でした。

## (3) 名誉会員の推薦

定款第5条に基づき、理事会において名誉会員候補者1名の推薦を決定しました。

名誉会員 奥 直人

## (4) 永年会員の決定

定款第5条に基づき、理事会において有功会員1名と永年会員22名を決定しました。永年会員には、記念品を贈呈いたしました。

有功会員 橋本 俊一

永年会員 池田 勝 大石 耕司 大熊 哲汪  
大沢 基保 緒方 宏泰 佐伯 壽美  
阪本 光男 佐藤 政男 鈴木 康夫  
田中 依子 田辺 信三 寺尾 允男  
内藤 猛章 中塚 巖 中室 克彦

夏莉 英昭 早川 堯夫 飛驒 辰彦  
福井 邦顕 藤倉 峻 吉田 雄三  
米勢 政勝

## 2) 財政基盤の確立

### (1) 賃貸収入と会館の運営

学会運営は、会費と学術事業収入等の経常収入によって賄われているのが一般的ですが、本学会では収益事業として、会館の賃貸収入をもって学会運営の財務基盤を安定にすることが出来ているという特徴があります。賃貸事業は長井記念館の周辺のテナントや社会情勢の影響を多分に受けることから、確実にテナントを確保すべく努めておりますが、2024年度は一部テナントの退去により一時的に賃貸収入が減少致しました。2025年度中にテナントを確保するように努め、運営基盤の安定化に資するよう賃貸管理業務と建物管理業務の改善を行ってまいります。

ならびに、学会が管理するホール、会議室などの会館施設の運営は、会員および一般の方への利用施設としての有効活用を委託先のビル管理会社と協力して利用者の便に供するよう努めました。

新型コロナ禍では、ホールや会議室の利用が低下していましたが、会議室ではその利用の回復が見られてきております。ホールの利用率の増加、テナントの維持や、会館の最大の効率的利用を引き続き継続して努力してまいります。

### (2) 長井記念館の維持管理

当館の経年劣化に伴う修繕計画について、管理代理会社を始めとする関係各社からの情報を基に、主体的に把握するよう努めてきました。現長井記念館は竣工から30年以上が経過し、今後、修繕費の一層の増加が見込まれています。

理事会では、2021年12月より、常任理事以下のワーキンググループを発足し、長期的な長井記念館の維持管理のため計画的な改修と建物の改築、そのための積立について計画策定を進めています。

### (3) 壽稻荷ご祭礼

当学会の初代会頭である、長井長義先生のご子孫がご寄贈下さった敷地の中に祀られている壽稻荷(ことぶきいなり)本殿に対し、毎年二(に)の午(うま)の日に日本薬学会主催でご祭礼を行っております。当本殿は、2009年(平成21年)に渋谷区の指定有形文化財に指定されています。本年度も、金王八幡宮の神職による神事を以下日程で執り行いました。

日 時：2024年2月14日(水)

場 所：日本薬学会長井記念館

---

## 2024年度役員一覧

---

会頭	岩淵 好治 (東北大院薬)
次期会頭候補副会頭	石井伊都子 (千葉大病院薬)
副会頭	林 良雄 (東京薬大薬)
	大嶋 孝志 (九大院薬)

常任理事	吉松賢太郎 (日本薬学会)	
総務担当理事	菅原 満 (北大院薬)	中川 晋作 (阪大院薬)
	永津 明人 (金城学院大薬)	松本 司 (医療創生大薬)
財務担当理事	伊藤 清美 (武蔵野大薬)	浦野 泰照 (東大院薬)
広報担当理事	小川美香子 (北大院薬)	須貝 威 (慶應大薬)
	栄田 敏之 (京都薬大)	
国際交流担当理事	佐藤 雅彦 (愛知学院大薬)	青木 一真 (第一三共)
	今井 輝子 (第一薬大)	
編集担当理事	高橋 秀依 (東京理大薬)	原 俊太郎 (昭和大薬)
学術事業担当理事	加藤 将夫 (金沢大院薬)	川邊 武史 (第一三共)
	小暮健太郎 (徳島大院医歯薬)	二木 史朗 (京大化学研)
	森岡 弘志 (熊本大院生命科学)	
監 事	国嶋 崇隆 (神戸学院大薬)	平井みどり (神戸大)
	望月 眞弓 (慶應大)	
顧 問	高倉 喜信 (京大)	
	佐々木茂貴 (長崎国際大薬)	

—————・\*・—————2024年度委員会・支部・部会一覧—————・\*・

### 常置委員会

役員候補者選考委員会	中川 晋作 (阪大院薬)
学会賞選考委員会	大高 章 (徳島大院医歯薬)
女性薬学研究者奨励賞選考委員会	鈴木 貴明 (山梨大病院薬)
創薬科学賞選考委員会	佐藤 元秀 (日本たばこ産業)
教育賞選考委員会	田中 秀治 (徳島大院医歯薬)
佐藤記念 医療貢献薬剤師賞選考委員会	檜垣 和孝 (岡山大院医歯薬)
創薬セミナー委員会	王子田彰夫 (九大院薬)
広報委員会	楠原 洋之 (東大院薬)
ファルマシア委員会	原 俊太郎 (昭和大薬)
学術誌編集委員会	中川 秀彦 (名市大院薬)
薬学雑誌	菅原 満 (北大院薬)
CPB	鈴木 孝禎 (阪大産業科学研)
BPB	松沢 厚 (東北大院薬)
総務委員会	林 良雄 (東京薬大薬)
人事委員会	岩渕 好治 (東北大院薬)
財務委員会	林 良雄 (東京薬大薬)
国際交流委員会	石井伊都子 (千葉大病院薬)
年会問題検討委員会	岩渕 好治 (東北大院薬)
薬学教育委員会	鈴木 匡 (名市大院薬)
ダイバーシティ推進委員会	林 良雄 (東京薬大薬)

### 特別委員会

長井記念薬学研究奨励特別委員会	高倉 喜信 (京大)
健康サポート薬局にかかる研修第三者確認委員会	松浦 克彦 (愛知学院大薬)

### 支部

北海道支部	南 雅文 (北大院薬)
-------	-------------

東北支部  
関東支部  
東海支部  
北陸支部  
関西支部  
中国四国支部  
九州山口支部

大江 知行 (東北大院薬)  
青木 淳賢 (東大院薬)  
原 英彰 (岐阜薬大)  
松下 良 (金沢大院薬)  
赤井 周司 (阪大院薬)  
田村 豊 (福山大薬)  
原武 衛 (崇城大薬)

### 部会

化学系薬学部会  
医薬化学部会  
生薬天然物部会  
物理系薬学部会  
構造活性相関部会  
生物系薬学部会  
薬理系薬学部会  
環境・衛生部会  
医療薬科学部会  
レギュラトリーサイエンス部会

大和田智彦 (東大院薬)  
青木 一真 (第一三共)  
脇本 敏幸 (北大院薬)  
加藤 博章 (京大院薬)  
志鷹真由子 (北里大薬)  
服部 光治 (名市大薬)  
上原 孝 (岡山大院医歯薬)  
原 俊太郎 (昭和大薬)  
北原 隆志 (山口大病院薬)  
本間 正充 (国立衛研)

### 事務局

事務局長

奈良 洋